ＩＳＳＮ 0285－4767

北海道考古学会だより

第　93　号
２００９．３．６

目　次

2009年度研究大会「擦文文化における地域間交渉・交易」……1
2009年度総会について……2
学会運営委員の改選　ー委員の推薦についてー……2
監査委員の改選　ー監査委員の推薦についてー……4
会誌編集委員の改選　ー編集委員の推薦についてー……4
2008年度遺跡調査報告会の実施報告……5
2008年度定例研究会開催報告……5
事務連絡
入会者のお知らせ……8
会費納入のお願い……8

2009年度　研究大会「擦文文化における地域間交渉・交易」

擦文文化の展開を考える上で、地域内外における交渉・交易の解明は重要な鍵となっています。今回の研究大会では、この交渉の実態について迫るべく、近年活発に魅力的な論考や調査成果を挙げられている方々をお招きして検討します。尚、擦文文化期全般、全道に対象を広げると膨大ですので、今回は、擦文文化中期～終末期まで、道央以南から東北における事例を扱います。

日　時：2009年５月９日（土）　10：00～17：30
会　場：北海道大学　学術交流会館小講堂（札幌市北区北８条西５丁目）
交　通：JR札幌駅北口　徒歩７分（北大正門から入るとすぐ左手に見えます）
＊駐車場はございません。公共の交通機関でお越し下さい。
内　容：
（午前の部）
９：30　開　場
10：00～10：40　「擦文文化の展開と交流の諸相」　瀬川　拓郎（旭川市博物館）
10：40～11：20　「擦文土器から見た地域間関係」　塚本　浩司（財団法人大阪府文化財センター）
11：20～12：00　「北奥出土の擦文（系）土器について」　齋藤　淳（中泊町博物館）
12：00～13：00　昼　食
（午後の部）
13：00～13：40　北海道考古学会総会
13：40～14：20　「擦文文化期の物流」　鈴木　琢也（北海道開拓記念館）
14：20～15：00　「余市周辺における擦文文化の様相」　乾　芳宏（余市水産博物館）
15：00～15：40　「近年の厚真町の発掘成果」　乾　哲也（厚真町教育委員会）
16：00～17：30　討　論　＊司　会：澤井　玄（北海学園大学）

※　報告のタイトルは変更される場合がありますのであらかじめご了承ください。
※　資料代として、1,000円（予定）を申し受けます。
※　研究大会終了後、懇親会を大学構内「きゃら亭」にておこないます（18：00～。会費は3,500円）。

2009年度　総会について

2009年度総会を研究大会の昼食休憩後、13時から開催します。もとより総会は、会員の皆様が会の運営に直接参加する重要な機会ですが、今回は運営委員の改選期にあたりますので、多くの会員の出席を期待します。なお、やむを得ず欠席される会員は、必ず委任状を提出されるようお願いします。

学会運営委員の改選　ー委員の推薦についてー

北海道考古学会会則第６条、委員および委員会規則第２条、および委員会公募細則に基づき、2009年度から2010年度の北海道考古学会運営委員を下記のとおり推薦願います。

規則第５条および第６条の規定により、地域委員10名、運営委員16名以内が会員の推薦を受け、総会で選出されます。ただし、地域委員は事務局所在地区、および近隣地域からは選出されません。会員は、所属する地区より１名を地域委員として、５名までの会員を運営委員として、同封の葉書または同様式に準じた封書にて事務局まで推薦ください。

なお委員選任に関する規則を下記に抜粋掲載します。詳しくは2007年11月発行の名簿をご参照ください。

会則　（関係部分）

第６条　本会に次の役員をおきます。

⑴　会　　長　１名
⑵　副 会 長　１名
⑶　地域委員　10名以内
⑷　運営委員　16名以内
⑸　監査委員　２名

２　地域・運営・監査委員は、会員の推薦を得て総会で選出し、正副会長は委員の互選により決定します。

３　会長は本会を代表し、副会長は会長を補佐します。地域委員は地域を代表し運営委員は本会の運営実務を担当し、監査委員は本会の会計を監査し総会に報告します。

４　委員の任期は１期、２ヵ年とします。ただし、２期、４ヵ年までの継続再任が出来ます。

北海道考古学会委員公募細則

（目的）

第１条　この細則は、北海道考古学会規則第１号「委員及び委員会規則」（以下、規則という。）第２条で規定する委員の選出方法について定めることを目的とする。

第２条　委員は会員の推薦により委員会が候補者を選定し、総会で決定する。

（推薦）

第３条　会員は、「地域委員」を規則第４条別表１の所属する地域に限り、その所属する地域の会員の中から１名を推薦できる。また「運営委員」を会員の中から５名を限度に推薦できる。

（推薦様式）

第４条　会員からの推薦は、様式１にて行う。封書、葉書およびＦＡＸにて受け付ける。

（委員選出）

第５条　委員選出の手続きは次のように行う。

１）公　　示　文書、だより等で総会の２ヶ月以上前に。
２）受　　付　総会の２ヶ月前から１ヶ月前まで事務局で。
３）集 計 審 査　受付終了直後、事務局で。
４）候補者選定　（委員会決定）総会直近の委員会で。
５）候補者公開　総会開催日までに。
６）委 員 選 出　総会議決。

（候補者選定）
第６条　会員推薦に基づき委員会での候補者選定は次のように行う。
１）地域委員　イ　集計　被推薦者が会員で所属地域居住者であること。委員辞任後、２ヵ年以上経過した会員であること。
ロ　集計　地域、被推薦者毎に。
ハ　候補者選定　地域毎に最大数の推薦を得た会員より順次本人の承諾を得て、１名を選定する。
２）運営委員　イ　審査　委員辞任後、２ヵ年以上経過した会員であること。
ロ　集計　被推薦者毎に。
ハ　候補者選定　最大数の推薦を得た会員より順次、本人の承諾を得て、定期改選時は16名以内、臨時改選時は欠員数を選定する。

第４条　別表１　地域委員選出地域表

地区名	所属範囲
第１地区	札幌市
第２地区	石狩管内
第３地区	後志管内
第４地区	渡島桧山管内
第５地区	日高胆振管内
第６地区	空知上川留萌宗谷管内
第７地区	網走管内
第８地区	十勝釧路根室管内
第９地区	東北地方管内
第10地区	本州地区（東北地方を除く）管内

別表２　運営委員業務担当表

業務名	業務内容	定数
会　長	会代表、委員会議長	1
副会長	会長補佐	1
総　務	総会開催、会庶務業務	２以内
会　計	会計事務	２以内
会　誌	編集委員、会誌発行業務	2
だより	だより発行業務	２以内
研究会	研究大会、月例研究会業務	２以内
見学会	遺跡見学会業務	２以内
報告会	遺跡発掘調査報告会業務	２以内

１．公募期間　2009年４月９日（事務局必着）まで
２．公募対象外会員
　会則及び規則により委員となることの出来ない会員は次のとおりです。この会員の推薦は無効となります。
地域委員　　松田功（第７地域）、高瀬克範（第10地域）
運営委員　　川名広文・阿部明義・石井淳・大泰司統・柏木大延・澤井玄・鈴木琢也・長町章弘・守屋豊人
３．再任対象会員
　現委員のうち、会則および規則により、継続再任が出来る会員は次のとおりです。
地域委員　　嶋井康夫（第３地域）、石井淳平（第４地域）、松田宏介（第５地域）、高畠孝宗（第６地域）、大橋毅（第８地域）、深澤百合子（第９地域）
運営委員　　越田賢一郎・木山克彦・坂梨夏代・下野直章・平川善祥

監査委員の改選　ー監査委員の推薦についてー

会則第６条の３の規定に基づき、2009年度から2010年度の「監査委員」を下記のとおり推薦願います。北海道考古学会会員名簿などを参考に、監査委員を同封ハガキまたは同様式に準じた封書にて事務局までご推薦ください。

１．推薦期間　2009年４月９日（事務局必着）
２．推薦様式
　監査委員の推薦様式は運営委員の推薦様式に準じ、一会員につき２名までの会員を御推薦下さい。
３．推薦対象外会員
　現委員のうち、会則および規定により継続再任が出来ない会員は次のとおりです。この会員の推薦は無効となります。
　高橋和樹
４．再選対象会員
　現委員のうち、会則および規定により継続再任が出来る会員は次のとおりです。
　菊池俊彦

会誌編集委員の改選　ー編集委員の推薦についてー

会則第９条の３および北海道考古学会会誌編集委員会設置要綱（以下「要綱」）２の１の規定に基づき、2009年度から2010年度の「会誌編集委員」を下記のとおり推薦願います。会誌編集委員会は、会員の中から推薦された５名（１号委員）と、運営委員会の会誌担当委員（２号委員）により構成されます。一般会員の中から北海道考古学会会員名簿などを参考に、５名を同封ハガキまたは同様式に準じた封書にて事務局までご推薦ください。

１．推薦期間　2009年４月９日（事務局必着）
２．推薦様式
　会誌編集委員の推薦様式は、運営委員の推薦様式に応じ、１会員につき５名までの会員を御推薦下さい。なお、委員への委嘱は会長が行います。

> 北海道考古学会会誌編集委員会設置要綱　（関係部分）
> ２．組織
> １）編集委員会は、会員の中から推薦された５名（１号委員）と運営委員会の会誌担当委員（２号委員）２名との７名の委員により構成され、北海道考古学会会長が委嘱する。
> ２）編集委員会に編集委員長および副編集委員長各１名を委員の互選により置く。
> ３）編集委員の任期は運営委員に準ずる。

３．推薦対象外会員
　現委員のうち、要綱により継続再任が出来ない会員は次のとおりです。この会員の推薦は無効となります。
　野村崇・加藤博文・鈴木信・宗像公司
４．再選対象会員
　現委員のうち、会則および規定により継続再任が出来る会員は次のとおりです。
　熊木俊朗・平川善祥・守屋豊人

2008年度遺跡調査報告会の実施報告

報告会は、2008年12月20日（土）に、北海道大学学術交流会館講堂にて、およそ100名の参加のもと行われました。2008年に調査が行われた道内80あまりの遺跡の中から、下記の８遺跡について報告がありました。各遺跡のもたらす情報の豊かさとその導き出し方など、今後の調査も注目されるところです。また今年は国際交流部門の活動の一環として、近年開発の進むサハリンにおける考古学調査の報告があり、懇親会での交流も行われました。

〔発表遺跡〕 ①千歳市　祝梅川上田遺跡・アンカリトー７遺跡
②石狩市　紅葉山52号遺跡・札幌市K483遺跡
③厚真町　オニキシベ２遺跡・ヲチャラセナイチャシ跡
④釧路市　幣舞２遺跡
⑤札幌市　K39遺跡工学部共用実験研究棟地点
⑥釧路町　天寧１遺跡
⑦函館市　豊崎B遺跡
⑧森町　　鷲ノ木遺跡

特別報告　2003～2007年におけるサハリン国立大学の考古学調査

2008年度定例研究会開催報告

今年度は３回の定例研究会を実施し、計５本の発表が行われました。各発表者ご本人に内容をまとめていただきましたので、本紙で報告いたします。発表者の方々にはご多忙の中、ご発表いただくとともに、紙面の都合上、限られた字数に内容を収めるご無理を承知いただきました。厚く御礼申し上げます。また会場利用をご快諾いただいた天野哲也氏を始めとする北海道大学総合博物館の方々、第１回定例研究会でコメンテーターを引き受けてくださった石井淳平氏（厚沢部町教育委員会）、鈴木琢也氏（北海道開拓記念館）、そして当日会場にお越しいただき、貴重なご意見を下さった参加者の皆様に感謝申し上げます。

第１回定例研究会

○日　時：平成20年７月12日（土）午後１：30～　○場　所：北海道大学総合博物館 中２階 中会議室
○発表者：中澤　寛将（中央大学大学院）
○題　目：「日本列島北部における須恵器生産・流通・消費をめぐる諸問題」
○要　旨：出羽・陸奥両国における須恵器生産は、８世紀前半代に城柵・官衙の設置に伴って導入され、９世紀末葉になると津軽でも行われるようになる。古代東北地方北部の須恵器研究では、津軽・五所川原窯跡群の実態が明らかになったものの、須恵器生産技術の拡散過程や須恵器生産体制、五所川原産以外の須恵器の産地問題など課題も多い。近年の調査によって、エミシ社会の須恵器生産は小地域内での流通を目的として操業され、五所川原窯も津軽地域への供給を主体とした地方窯の一形態と捉えられることが明らかになってきた。そこで本報告では、東北地方北部と北海道における須恵器を対象とし、集落遺跡における須恵器の消費状況、東北地方北部の須恵器生産技術の特質、五所川原窯初現期の須恵器生産技術の系統関係について検討を加え、日本列島北部のエミシ社会における須恵器生産導入の契機とその意義について試論を述べた。

○発表者：布施　和洋（北海道大学大学院）
○題　目：「北海道島における陶磁器の流通と消費－12世紀～16世紀の北海道島の諸相－」
○要　旨：北海道島では12～16世紀代の陶磁器は道南部～道央部を中心として66遺跡から出土している。本発表では北海道島を道南部・道央部日本海側・道央部太平洋側の大きく３地域に区分し、各時期の遺

跡数・遺物数・産地別構成比・器種別構成比に着目した。その上で、陶磁器の各属性の時系列的な空間分布と陶磁器構成の地域間比較により北海道島内における流通状況の差異を論じた。特に地域性という視点からは、道南部と道央部で陶磁器出土量・セット関係に違いがみられ、特定器種・特定産地の欠如が認められた。また、Ⅲ（14世紀後半～15世紀中葉）・Ⅳ（15世紀末～16世紀）期の道央部における壷・甕の欠如、Ⅳ期のすり鉢の欠如も特異的な地域性として指摘できる。さらに、単一器種での出土や道央部にのみみられる特殊な出土状況は道南部とは異なる文脈の中で受容された陶磁器の性格が伺われる。また、陶磁器受容にみられた地域性は、陶磁器流通の受容者集団の差としての可能性がある。北海道島における陶磁器の地域的傾向は当時の全国的な流通・受容形態とは異なる様相を示し、これは選択的な陶磁器の入手形態と評価した。

第２回定例研究会

○日　時：平成20年11月22日（土）午後１：30～　○場　所：北海道大学総合博物館　共同研究室

○発表者：荒山　千恵（北海道大学大学院文学研究科専門研究員）

○題　目：「日本列島における音響発生器具の受容と展開」

○要　旨：日本の音文化を対象とした歴史的研究は、主に文献史学・民族学を中心にすすめられてきた。しかし、文献記述に乏しい古墳時代以前の音文化の様相を具体的に論じることには限界があった。考古学研究においても、無形である「音」を主体とする音文化について議論されることは極めて少なかったが、近年では音響発生器具（楽器、音具など）の出土例が増加し、これらの資料に対する考古学的評価・見解が求められるようになっている。

日本列島から出土した音響発生器具の多くは大陸文化に由来するものと考えられている。ただし、それらの受容と展開は、大陸における音響発生器具の機能・用途に必ずしも連動するものではない。アジア大陸の東端に位置する日本列島ではそれらの音響発生器具をどのように受容・展開したのか。本発表では、これまでに日本列島から出土した音響発生器具を紹介しながら、上記問題について検討した。

まとめとして次のことを指摘した。日本列島に定型化した音響発生器具の製作・使用が一定の時間幅と地域的広がりをもって考古学的に認められるようになるのは、弥生中期における打鳴系の「鐸」・絃鳴系の「琴」においてである。金属音を打ち鳴らす「鐸」、多絃を鳴らす「琴」の使用は、それ以前の「音」文化に比べ、音量・音色・音程が多様化し、人工的な音響に対する認識への大きな変化を示していると考えられる。ただし、弥生文化の段階では祭祀具としての位置付けが強く、これらの楽器的・音楽的な性格は弱い。古墳中期頃になると、「琴」と「筑形木製品」、「琴」と「鈴」など、種類の異なる音響発生器具を「合奏」的に使用した可能性が考えられるようになる。列島では、この頃に「音楽」的概念が発達することを推測した。

○発表者：小林　紘一（株式会社パレオ・ラボ）

○題　目：「AMSによる炭素14年代測定」

○要　旨：放射性同位元素の一つである炭素14（^{14}C）を使う年代測定法は、正確に時を刻む時計を使う方法の一つとして半世紀ほど前から徐々に浸透してきた。しかしながら、^{14}Cが放出する放射線の量を計数する従来の測定方法は、大量の試料を必要とするためにその活躍の場が限られていた。

30年前に開発されたAMS（Accelerator Mass Spectrometry：加速器質量分析法）は、様々な放射性元素の超高感度測定を可能にした。AMS法による^{14}C年代測定は、放射線（β線）測定法に比べて試料量が1/1000以下で済むために、考古学のように貴重な試料や微量な試料を扱う分野において活躍するようになったAMS応用技術の一つである。

自然界の炭素は^{12}Cと^{13}Cという安定同位元素の中に^{14}Cという放射性同位元素をごく僅か含んでいて、生物の体を作っている。^{14}Cは、半減期5730年でβ線を放出して崩壊するが、一方、地球大気に降り注ぐ宇宙線により絶えず生成されているので、崩壊と生成が平衡状態になって大気中の^{14}C濃度はほぼ一定に保たれる。作られた^{14}Cは二酸化炭素として大気中の通常の二酸化炭素と混ざり地球表面を循環する。従って、大気中の二酸化炭素の炭素同位体比はほぼ一定の$^{14}C/^{12}C=1.2\times10^{-12}$という値になる（現代炭素という）。この二酸化炭素は光合成を通じて動植物の体を作り、一方では海水に吸収されて様々な形の有機物を形

成する。生物は生存中には現代炭素で体を維持するが、死んだ瞬間から^{14}Cの数が減りはじめるので、遺された有機物中の^{14}Cの濃度即ち^{14}C/^{12}Cを測定することにより、死後の経過年代が得られる。

β線測定法は、^{14}Cの崩壊を待ってその計数率を測定し、それに比例する^{14}Cの数を算出するという方法である。しかしながら、半減期が長いのでほとんど崩壊せず、例えば１グラムの現代炭素には約600億個もの^{14}Cが含まれているにもかかわらず、１分間にわずか14個のβ線を放出するのみである。一方、崩壊する前のこの600億という数を直接に数えるのがAMS法である。直接計数の効率がたとえ非常に小さくても十分過ぎる数を計数できるため、実際には１ミリグラム程度の炭素、即ち1/1000の量の炭素があればβ線測定法を上回る高精度の測定が可能である。但し、どちらも^{14}Cの崩壊という同じ物理現象を利用しているので、従来のβ線測定法とAMS法による年代測定は同じ結果を与える。

AMSは試料の^{14}C/^{12}Cを測定する。しかしながら、現代の試料でさえ^{14}C/^{12}Cは1.2×10^{-12}という小さい値であり、５万年前の試料ではそれよりも３桁も小さくなり、通常の質量分析法では測定不可能である。現代炭素試料の年代測定は１兆個もの^{12}Cの海の中に含まれるわずか１個の^{14}Cを探し出すという割合の測定をするのであるが、その海の中にはあたかも^{14}Cの顔をした偽物が多量に存在して測定の邪魔をするので、その妨害を除く必要がある。詳細は省略するが、AMSでは、目的元素のイオンを加速して高エネルギーにすることにより、妨害イオンを識別する様々な技術が利用可能となるため、^{14}Cだけを選別して計数できるのである。

このように、通常の質量分析計に小型加速器を組み込んだ形のシステムが加速器質量分析装置であり、^{10}Be（半減期：150万年）、^{14}C（5730年）、^{26}Al（72万年）、^{36}Cl（31万年）、^{129}I（1600万年）などの極微量の長半減期放射性同位元素の濃度測定に利用されている。これら放射性同位元素は「正確に時を刻む時計」であり、それらを利用するいろいろな年代測定法が開発されて、考古学以外にも宇宙・地球科学、環境科学などの様々な分野で活躍している。^{14}C年代測定はその応用技術の一つである。

AMSによれば、5000年ほど昔の米粒一粒で十分な精度の年代測定が約１時間で可能であるが、一方、β線測定法では1000粒程度が必要でありしかも約一週間の測定時間を要する。また、AMSでは約５万年の年代測定が可能であるのに対し、β線測定法による測定限度は約３万５千年である。

^{14}C年代測定法そのものにはまだ解決すべき問題点がいくつか存在する。その内の一つは「大気中の^{14}C/^{12}Cは、いつの時代も一定であり、地球上のどの場所でも同じである」という「年代測定が成り立つための大前提」に関する問題である。この大前提は様々な理由により完全には成り立っていないが、20年ほど前から研究されてきた暦年較正法によりほぼ解決されつつある。詳細は省略する。

紙数の都合で試料の前処理や装置について触れなかったが、忘れてはならないのは、いかに優れた装置でもボタンを押すだけで信頼できる結果が出るわけではないということである。これを操作する人間の技量が測定結果の信頼性を高める、という認識が重要である。

第３回定例研究会

○日　時：2009年２月８日（日）午後１：30～　○場　所：北海道大学総合博物館　共同研究室

○発表者：守屋　豊人（北海道大学）

○題　目：「続縄文時代竪穴住居の上屋構造」

○要　旨：続縄文時代集落の特色を概観する中で、火災にあって焼失した竪穴住居址（焼失住居址と呼称）の割合を示した後、焼失住居址から発見される炭化材を樹種同定した結果から上屋の素材に利用される樹木をまとめ、炭化材や焼土が焼失住居址から発見される状態を分析することで、続縄文時代前葉～中葉の竪穴住居址に数種類の上屋構造があると推定した。

入会者のお知らせ

≪新入会員≫　※五十音順・敬称略

猪熊樹人（根室市）　　内田和典（東京都）　　三谷智広（虻田郡）

※退会者については、個人情報保護のため掲載を控えています。

会費納入のお願い

委員会では会計担当を中心に、未納会費の収納や収入の確保に努力しておりますが、未だ、楽観できない状況が続いております。会の運営には、会員の皆様のご協力が不可欠です。会費の年度内納入にご協力いただきますようお願い申し上げます。また、本年度を除く過去３年以上の会費が納入されていない会員には、北海道考古学会誌を送付しておりません。会費納入を確認した後、送付いたします。

郵便局口座番号：02770-6-8358　　加入者名：北海道考古学会
年会費：（一般）5,000円　　（学部本科生）3,500円

北海道考古学会だより　　第93号　　2009年３月６日　発行
発行所　北海道考古学会（HP：http : //www.h7.dion.ne.jp/~hokkouko/）
事務局；〒062-8520　札幌市豊平区西岡３条７丁目３番１号
札幌大学文化学部　川名研究室気付　TEL/FAX（011)852-9313
E-mail；hokkaidokoukogakkai@m9.dion.ne.jp
印　刷　北海道図書企画　（011)668－1131